社会科における生きる力をはぐくむ指導の工夫
ー歴史的分野の問題解決的な学習を通してー

浦添市立港川中学校
稲福政彦

Ⅰ　テーマ設定の理由 ・・・・・・・・・・・・ 1
Ⅱ　研究の目標 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
Ⅲ　研究の仮説 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
1　基本仮説 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
2　作業仮説 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
Ⅳ　研究の内容 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
1　社会科における「生きる力」 ・・・・・・・・・・・・・・ 2
（1）　「生きる力」の概念と背景 ・・・・・・・・・・・・・ 2
（2）　新指導要領にみる「生きる力」 ・・・・・・・・・・・ 3
（3）　「生きる力」をはぐくむ授業の改善 ・・・・・・・・・ 3
①　改善の視点 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
②　教材開発の工夫 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
2　「生きる力」としての問題解決力 ・・・・・・・・・・・・ 4
（1）　問題解決的な学習の概念と背景 ・・・・・・・・・・・ 4
（2）　新指導要領にみる問題解決的な学習 ・・・・・・・・・ 4
（3）　問題解決的な学習過程と指導の工夫 ・・・・・・・・・ 4
3　地域素材の教材化 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
（1）　地域素材を教材化する意義 ・・・・・・・・・・・・・ 5
（2）　地域素材の教材化のポイント ・・・・・・・・・・・・ 6
4　新課程における社会科(地理的・歴史的分野)の指導計画 ・・・・・・ 6
（1）　現行・移行期・新課程における授業時数の比較 ・・・・ 6
（2）　新課程に基づく歴史的分野の年間指導計画(試案) ・・・ 7
Ⅴ　研究の実践 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
1　単元名 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
2　単元目標 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
3　単元の設定理由 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
（1）　教材観 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
（2）　生徒観 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
4　指導計画 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
5　本時の活動 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
（1）　本時のねらい ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
（2）　本時の展開 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
6　提示資料および各種プリント ・・・・・・・・・・・・・・13
7　本時の評価 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
8　本時の反省 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
Ⅵ　研究の成果と課題 ・・・・・・・・・・・・・・15
1　研究の成果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
（1）　授業後の感想文の考察 ・・・・・・・・・・・・・・・15
（2）　アンケートの考察 ・・・・・・・・・・・・・・・・・16
（3）　作業仮説１について ・・・・・・・・・・・・・・・・17
（4）　作業仮説２について ・・・・・・・・・・・・・・・・17
（5）　作業仮説３について ・・・・・・・・・・・・・・・・18
2　今後の課題 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
おわりに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
主な引用・参考文献 ・・・・・・・・・・・・・・・・19

社会科における生きる力をはぐくむ指導の工夫
── 歴史的分野の問題解決的な学習を通して ──

浦添市立港川中学校教諭　稲　福　政　彦

【要　約】

本研究は問題解決的な学習を通して，社会科における生きる力をはぐくむための指導の工夫をテーマに，理論研究とそれに基づいた身近な地域の歴史的事象を取り上げ，問題解決的な学習の授業展開を試みた。その結果，生徒らが主体的に問題解決に取り組み，社会事象や身近な地域への興味・関心が高まり，歴史的思考力，いわゆる社会科における生きる力をはぐくむことができた。

キーワード　□生きる力　□問題解決的な学習　□地域素材の教材化
□歴史学概念を獲得させるケーススタディ

Ⅰ　テーマ設定の理由

１９９８（平成１０）年１２月に告示された中学校新学習指導要領では「生徒に生きる力をはぐくむこと」を目指し，「体験的な学習や問題解決的な学習」と「生徒の興味・関心を生かし，自主的，自発的な学習が促される工夫をすること」が重視されている。特に今回は，自ら学ぶ意欲や主体的に学ぶ力を身につけるとともに，自らの力で論理的に考え判断する力，自分の考えや思いを的確に表現する力，問題を発見し解決する能力などの育成が図れるような教育活動の積極的展開が求められている。また現代は情報社会であり，必要な情報はいつでも簡単に手に入れることができるように思われるが，問題解決をするためには様々な手段で情報を収集する能力や，その情報を問題解決のために取捨選択して活用する能力を身につける必要がある。

ところで日頃の学習活動の生徒たちは，結果だけ覚えることに終始し，学んだ知識はテストでしか役に立たず，実際の社会的事象には無関心で，問題意識をもてないという受動的な生徒が増えている。

これからの社会は変化の激しい先行き不透明な時代であり，生徒たちはこれまで予想もできなかった様々な問題に直面するであろう。その直面した問題に対して主体的に思考・判断・行動することによって問題を解決していかなければならない能力が，「生きる力」の知的側面である。そしてその能力は，問題解決的な学習過程ではぐくみたい資質や能力と同じである。

したがって社会科における「生きる力」をはぐくむためには，「社会事象に対する興味・関心を高めるためにはどうすればよいのか」という教科基盤をしっかりしなければならない。ここでは歴史的分野を通して進めるが，歴史学習の意義は社会の事物・事象を空間的に考察し，同時に時間的な考察を加えることによって，社会認識を深めさせ，それをもとに日々の生活をより有意義で充実したものへと創造していくことができる生徒を育てることである。すなわち生徒自らが歴史をたぐり寄せていく歴史学習は，「生きる力」をはぐくむには適当である。その中で地域素材を教材化することによって，生徒たちの興味・関心がますます高まり，問題を把握する力，様々な資料を活用して多面的・多角的に考える力，適切に表現する力といった歴史的思考力，いわゆる社会科における「生きる力」がはぐくまれるだろうと考え，本テーマを設定した。

II　研究の目標

社会科（歴史的分野）の問題解決的な学習を通して，社会事象に対する興味・関心を高め，社会科における「生きる力」をはぐくむための指導を工夫する。

III　研究の仮説

1　基本仮説

社会科（歴史的分野）の問題解決的な学習を通して，生徒たちの興味・関心が高まり，社会科における「生きる力」がはぐくまれるであろう。

2　作業仮説

（1）　提示する教材内容が，①誰でも容易に理解できるもの，②意外性のあるもの，③追究・探究心をくすぐるもの，④内容に発展性のあるものであれば，生徒の興味・関心が高まり，自ら学習するテーマ設定がしやすくなるであろう。

（2）　既習事項をもとに見通しをもたせ，自己解決できるような指導を工夫すれば，学習意欲が高まり，社会科における「生きる力」が育つであろう。

（3）　地域素材を教材化し，年間指導計画に位置づけ，系統的に学習することで，琉球・沖縄史と世界・日本史との関連が理解でき，地域に対する理解が深まり地域社会を大切にする態度が育つであろう。

IV　研究の内容

1　社会科における「生きる力」

（1）　「生きる力」の概念と背景

「生きる力」とは，これからの変化の激しい社会においていかなる場面でも他人と協調しつつ自立的に社会生活を送っていくために必要となる人間としての実践的な力である。それは生きていくための「知恵」ともいえるので，「生きる力」の重要な要素として，次のことがあげられる。

○　自分で問題を見つけ，自ら考え，自ら問題を解決していく資質や能力。

○　理性的判断力や合理的精神だけでなく，美しいものや自然に感動する心といった豊かな感性。

○　正義感や公正さを重んじる心，生命を大切にし，人権を尊重する心などの基本的な倫理観や，他人を思いやる心の優しさ，相手の立場になって考えたり，共感することのできる温かい心，ボランティアなど社会貢献精神。

○　生涯にわたる健康な生活とたくましい体をはぐくむ。

そこで，「生きる力」の育成を重視する背景を二つあげてみる。

一つは，知識・技能偏重の教育への反省である。その結果，断片的な知識を多く持っていても，自らの生き方につながるものではなかった点である。

二つめは，これからの学力は，自ら学ぶ意欲や思考力・判断力・表現力などが大切にされなければならないという社会全体の要求である。こうした学力こそ，「生きる力」の資質や能力となるものであり，人間として他人と関わりながら生きていくうえで欠かせないものである。

図1．生きる力

（２）　新指導要領にみる「生きる力」

中学校社会科は「広い視野に立って，社会に対する関心を高め，諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し我が国の国土と歴史についての理解と愛情を深め，公民としての基礎的教養を培い，国際社会に生きる民主的，平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」ことを教科の目標としている。「公民的資質の基礎を養う」ということは，社会生活についての理解をもとに自分なりの社会的なものの見方や考え方をもって，これからの社会を主体的に生きることのできる力そのものを示していることから，社会科が生徒の「生きる力」をはぐくむことに寄与する部分が多い教科であるといえる。

（３）　「生きる力」をはぐくむ社会科の授業の改善

①　改善の視点

「生きる力」をはぐくむことをねらいとして社会科の授業改善に取り組む際，次のような具体的な改善の方向づけが必要となる。

○　聞くことの多い授業から自分で働きかける授業へ

○　覚えることの多い授業から活動することの多い授業へ

○　知識を増やす授業から知恵を働かす授業へ

○　答える一方の授業から自分の考えをもつ授業へ

○　一人の教師から教わる授業から複数の教師から教わる授業へ

○　教わろうとする授業から自分の生き方を考える授業へ

つまり生徒の立場からの授業改善を行い，授業の対する受動的なイメージを払拭しなければ「生きる力」は身に付かないと考える。同時に，学習形態や教材の質の吟味も必要となる。

②　教材開発の工夫

（ア）　生徒の興味・関心を喚起できる教材の開発

社会科授業において生徒ひとりひとりの「生きる力」をはぐくむためには，教材のよしあしが大きく関わってくるので，教材を開発するにあたって生徒が毎日の生活の中で何に興味・関心をもっているかや，問題を追究していく過程でどんなことに興味・関心を示すかなど，生徒の興味・関心を喚起できる教材を取り上げるようにする。

（イ）　生徒が学び方を学べる教材の開発

生徒の「生きる力」をはぐくむ社会科授業は，生徒が主体的に問題解決のための追究活動を行いながら社会認識を深めていくことにその本質がある。その追究活動を通じて，ものの見方や考え方などを深めていくことができるための手順や方法等を学びとることのできる教材の開発が必要となる。

（ウ）　生徒の感動と共感を呼び起こすことのできる教材の開発

生徒は感動的な場面に直面すると，知的好奇心を高め，主体的に追究しようとする意欲を示す。特に社会科の授業展開では，人間の願いや営み，生き方等に感動したり，共感したりすることで，生徒が学ぶ喜びや楽しさを味わい，意欲的に学習に取り組めることになる。

（エ）　生徒が切実感をもって追究できる教材の開発

生徒が社会事象を自分自身に関わる切実な問題として受けとめ，追究できる教材を開発していくことが大切である。生徒が切実感をもって追究できる教材として，次のような条件をもつことが必要とされる。

○　生徒の関心と必要に動機づけられた教材。

○　生徒なりの考えを生かして，意志決定ができる教材。

○　生徒が感じたことや疑問に思ったことをそのままぶつけられる教材。

○　生徒にとって具体的である教材。

○　生徒の生活と関わりの深い教材。

以上の条件から教材の開発に際しては，生徒の既有の経験や知識，能力等を十分に把握した上で，教材の選択や配列を工夫することが大切である。

2　「生きる力」としての問題解決的力

（1）　問題解決的な学習の概念と背景

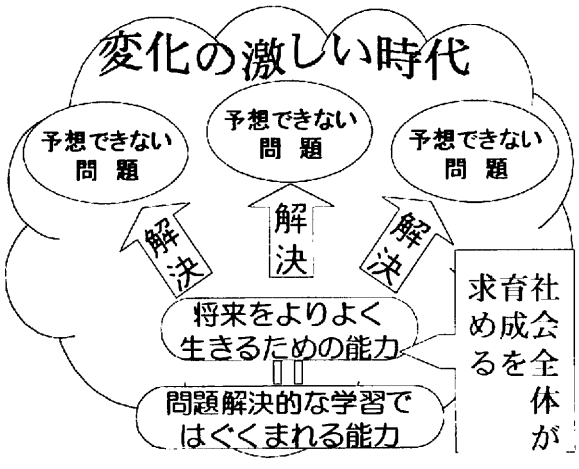


図2．問題解決的な学習

問題解決的な学習とは，知識の教え込みを排し，生徒ひとりひとりが自らの問題意識に即して学習問題をとらえ，問題解決に主体的に取り組み，思考を働かせて，その解決のための方法を追究する学習形態である。「問題解決の思考過程」を歩むことによって，生きて働く知識を獲得し，科学的な思考力を形成しながら「自分なりの考え」をもち，その考えを他者とよりよく「関わり合い」ながらさらに思考を深めることを目指しており，新学習指導要領にもその内容が盛り込まれている。

そこで「問題解決的な学習」を重視する社会背景をあげてみる。

これからの社会は変化の激しい時代であり，生徒たちはこれまで予想もできなかった様々な問題に直面し，それに対して主体的に思考・判断・行動することで問題解決を図らなければならない。将来をよりよく生きていくための能力の育成を社会全体が求めており，その能力とは問題解決的な学習によってはぐくまれる能力そのものである。

（2）　新指導要領にみる問題解決的な学習

社会科は問題解決的な学習過程を重視する教科であり，その学習モデルとなる教科として戦後発足した教科である。

そこで新学習指導要領中学校社会科では，生徒に基礎的・基本的な内容が確実に習得されるようにすることを前提として，問題解決的な学習を積極的に取り入れ，先述した将来をよりよく生きていくための能力の育成を目指している。したがってこれからの社会科は，問題解決的な学習を基盤として社会認識を深め，それをもとに，日々の生活をより有意義で充実したものへと創造していくことができる生徒を育てる教科になるといえる。

（3）　問題解決的な学習過程と指導の工夫

問題解決的な学習は学習過程が明確になっていなければ，生徒は自ら問題を見つけ，その解決に取り組むようにはならない。そこで次のような社会科における問題解決的な学習を組み立てていく四つの段階が考えられる。

①　学習問題に気づく段階

新しい事実に出会わせ，生徒の既有の知識や経験とのずれを起こさせる段階である。このずれが「どうしてだろう」などの内発的動機を高めることになる。こうした動機づけに支えられた活動によって，学習問題を自分の問題

としてとらえ，解決しようとする欲求が高まっていく。この段階は問題解決的な学習過程で重要なところであり，学習の方向付けや成果は，この段階で生徒が主体的な行動ができるかどうかが決め手となるので，次の指導の工夫が必要となる。

○　既有の経験や知識との共通点や相違点を考えさせる。

○　何が問題点なのかを考えさせる。

②　学習問題に対して推論を立てる段階

「自分ならこう思う」「おそらく○○ではないか」「この前学習したあの考えを使えば解決できるかも」というように，既習したことをもとに推論を立てることができるように教師側は支援する。この段階の具体的な指導の工夫として，問題を解決するために実行可能な計画を考えさせるようにする。

③　学習問題を追究する段階

先に立てた推論を検証する段階である。学習問題の解決に向けて既習したことや既有知識，解決の方法を用い，「あの方法ならば解決できる」「この前学んだことを使えば疑問が解ける」というように解決に取り組ませるように教師側は以下の具体的な支援が必要である。

○　個性を生かした役割分担を考えさせる（グループ学習の場合）。

○　生徒の主体性を生かすために問題を多面的・多角的にとらえさせ，新しいものの見方ができるように，指導・助言していく。

○　グループ学習を取り入れることで生徒が問題発見や追究の場面などで自らの考えを出しやすいように配慮する。

○　生徒ひとりひとりの学習活動への取り組みを観察し，そのがんばりを共感的に見取るとともに，支援に生かしていく。

④　学習問題をまとめ，発表する段階

先に追究して調べたことを自分なりの表現方法を用いてまとめ，発表する段階である。「なるほど，こういうことか」「級友の意見を聞いて，もう一度考え直したい」「これをもっと調べてみたい」というように，調べてわかったことや発表して気づいたこと，新たに疑問として残り，もっと調べてみたいことなどをまとめていくように教師側は以下の具体的な支援をする。

○　対象となる問題の特徴を他と比較しながら考えさせる。

○　意見発表や問題追究の場面など学習活動全般にわたって，生徒ひとりひとりの活動に適切な支援（賞賛・助言・励まし）をおこなう。

○　自己評価や相互評価カードなどを活用し生徒ひとりひとりのよさや可能性を見取り次の学習へつなげる。

社会科における問題解決的な学習を組み立てていく四つの段階は，教師のねらいや学習環境，生徒の実態に即して様々な学習形態が考えられる。したがって問題解決的な学習に取り組む場合，「学習内容が生徒の興味・関心に即したものか」「学習時間数は確保されているか」「学習教材や学習環境は適正か」などの検討も必要になる。

3　地域素材の教材化

（1）　地域素材を教材化する意義

①　生徒にとって身近である

教材が身近であるということは，それらに親しみをもって接することができるというだけではなく，自分自身や自分の生活との関わりで考えたり調べたりすることができる。

生徒は教材化された身近な社会事象

との出会いを通して，地域理解を深めるようになるとともに，このような学習を通して，生徒は地域社会の一員としての自覚をもち地域社会に対して誇りを抱くようになる。

② 「螺旋的（スパイラル）拡大」をおこなう

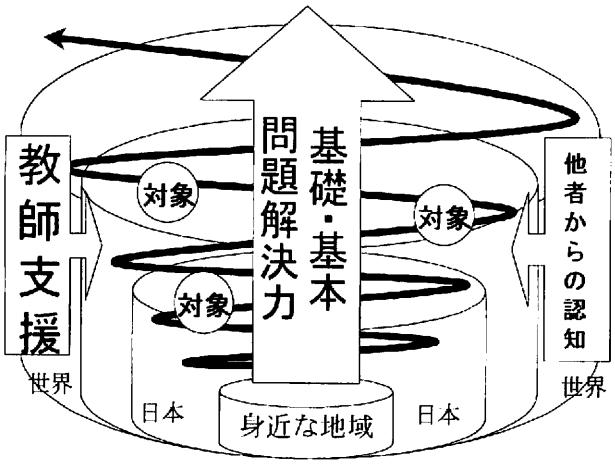


図３．地域教材の螺旋的(ｽﾊﾟｲﾗﾙ)拡大

「螺旋的（スパイラル）拡大」とは，既習事項を基礎として必要な知識を積み上げることによって問題解決を図る「階段型」と，学習の対象や経験の場を拡大していくことによって問題解決を図る「同心円型」の複合型である。

学習の対象や経験の場を身近な地域を基盤として，そこで得た必要な知識の積み上げを繰り返し行うことによって，学習の対象や経験の場を拡大させ，さらに教師等の支援や他者からの認知などの外的要因によって問題解決力が高まるのである。

（２） 地域素材の教材化のポイント

○ 生徒の身近にある地域素材を取り上げた教材。

○ 自分との関わりから興味・関心をもって追究，問題把握できる教材。

○ 自分の力で解決できる学習問題が含まれている教材。

○ 自分なりに学習計画を立て，見通しをもって問題を追究できる教材。

○ 生徒が自ら進んで調べ，観察し，創意をもって表現できる内容が含まれた教材。

○ 学習を通じて，豊かで多様な社会的見方・考え方が養え，学習の発展性が含まれた教材。

○ 学習問題の解決によって地域社会に関心をもち，地域社会の一員として関わっていこうとする態度が培われる教材。

4 新課程における社会科(地理的・歴史的分野)の指導計画

（１） 現行・移行期・新課程における授業時数の比較

２００２（平成１４）年度に完全実施される新教育課程の地理的・歴史的分野の授業時数は，基礎・基本的事項の確実な修得と内容の精選で次の通りになる。

表１．社会科(地理的・歴史的分野)の授業時数

区分 ＼ 教科		社会(地理的または歴史的分野)
第二学年	現行	１４０時間
第一学年	平成12年度	１４０時間（現行学習指導要領に対応しながら105時間で行う）
	平成13年度	
	平成14年度	１０５時間

（２） 新課程に基づく歴史的分野の年間指導計画(試案)

地域史を関連または特設教材として系統的に扱うことによって，日本や世界の歴史との関連を考察する手がかりを見いだし，地域を理解することが考えられる。

大　項　目	中　項　目	小　　項　　目	備　　考
歴史の流れと地域の歴史（１２）	歴史の流れ（６）	歴史の流れ	①歴史を学ぶにあたって ②～⑥歴史の中の人物
	地域の歴史（６）	身近な地域の歴史	①～⑥身近な地域の歴史
古代までの日本（１３）	人類の出現と古代文明（４）	人類の出現	①人類の誕生とそのくらし ②港川人
		文明の発生	①中国の古代文明（漢字と金属器の使用） ②　〃　（稲作の伝播）
	国家の形成（３）	東アジアとのかかわり	①邪馬台国から大和朝廷へ
		古墳の広まり	①古墳と信仰
		大和朝廷による統一	①渡来人の役割
	律令国家と遣唐使（５）	聖徳太子の政治から摂関政治	①隋・唐の政治とその交流 ②聖徳太子の政治 ③大化の改新 ④律令国家の確立 ⑤摂関政治
	文化の国風化（１）	文化の国風化	①仏教の影響をうけた文化
中世の日本（１２）	武家社会の展開（７）	鎌倉幕府と室町幕府	①鎌倉幕府の成立 ②元寇 ③南北朝の争い ④室町幕府の成立
		東アジア世界とのかかわりと戦国時代	①日明貿易 ②琉球王国の成立 ③応仁の乱から戦国時代へ
	中世日本の社会と文化（５）	中世の文化	①室町文化 ②室町文化にふれる（茶道）
		農村と都市の生活	①農・商工業の発達 ②農村の自治 ③都市の自治

近世の日本（１７）	戦国の動乱（２）	戦国時代とヨーロッパ人来航	①戦国大名の出現 ②鉄砲とキリスト教の伝来
	織田・豊臣による統一事業（２）	織田・豊臣の天下統一と文化	①織田信長の政治 ②豊臣秀吉の政治
	江戸幕府（６）	江戸幕府の成立と政治・外交	①江戸幕府の成立 ②大名や朝廷・公家の統制 ③身分制度確立と農民・町人の統制 ④鎖国 ⑤薩摩藩による琉球支配 ⑥松前藩による蝦夷地の支配
	江戸時代の社会と文化（３）	産業・交通の発達 都市と町人文化	①農業の進歩と諸産業の発達 ②交通と都市の発達 ③町人文化（元禄・化政）
	欧米諸国の接近と幕府の改革（４）	欧米諸国の接近と幕府の政治改革	①貨幣経済と百姓一揆 ②享保の改革と田沼意次の政治 ③寛政の改革と天保の改革
		新しい学問・思想の動き	①国学と蘭学
近現代の日本と世界（４３）	欧米諸国の改革と世界進出（５）	市民革命・産業革命	①イギリスの革命 ②フランスの革命
		欧米諸国のアジアへの進出と開国	①アジアの植民地化 ②ペリー来航 ③幕府の滅亡
	明治維新（５）	新政府の諸改革と人々の生活	①明治維新 ②廃藩置県 ③学制・兵制・税制の改革 ④新政府の外交と国境確定 ⑤琉球処分と北海道の開拓
	日本の近代化と国際関係（７）	自由民権運動と大日本帝国憲法の制定	①自由民権運動 ②政党のおこりと農民 ③沖縄の自由民権運動 ④大日本帝国憲法と帝国議会の開設

		日清・日露戦争と条約改正	①日清戦争と強国の中国侵略 ②日露戦争と条約改正 ③日本の植民地支配
	近代産業の発展（4）	日本の産業革命と国民生活の変化	①日本の産業革命 ②社会問題の発生 ③ソテツ地獄と移民・出稼ぎ ④近代文化の形成
	第一次世界大戦前後の国際情勢（7）	第一次世界大戦とアジアの民族運動	①大戦の背景と日本の参戦 ②ロシア革命と日本 ③ベルサイユ条約と国際連盟 ④アジアの民族運動と日本
		大正デモクラシー	①米騒動と高まる社会運動 ②政党政治と普通選挙制 ③大正時代の文化
	第二次世界大戦までの日本（8）	軍部の台頭と日中戦争	①世界恐慌とファシズム ②満州事変と国際連盟脱退 ③日中戦争
		第二次世界大戦 アジア太平洋戦争	①第二次世界大戦のはじまり ②アジア太平洋戦争 ③南進政策と沖縄 ④沖縄戦 ⑤広島・長崎の原爆投下
	戦後日本の成長と国際関係（3）	民主化と国際社会への参加	①連合国の占領政策 ②国際連合と冷戦 ③戦後のアジアと日本の独立
	高度成長以降の日本社会と世界（4）	現代の世界・日本の問題点	①戦後の沖縄 ②沖縄の日本復帰 ③石油ショック ④現代の世界情勢
総　計	**９７時間**　（定期テスト５時間と３時間の補充・深化は除く） （そのうち身近な地域の歴史との関連は **２６時間**）		

▒▒▒▒ は身近な地域（琉球・沖縄）の歴史との関連または特設授業

V　研究の実践

1　単元名

地域の歴史　（身近な地域の歴史　－宮古・サンシイ事件を通して－）

2　単元目標

身近な地域の歴史を調べる活動を通して，歴史の学び方を身につけさせるとともに，地域への関心を高め，地域の具体的な事例との関わりの中で日本または世界の歴史を理解させる。

3　単元の設定理由

（1）　教材観

２１世紀を目前に控え，歴史教育も大きな視点の転換期にさしかかっている。それは学び方や調べ方にかかわる知識を，生徒に身につけさせる大切な知識として明確に位置づけられた点である。

ここでは，イギリスの歴史教育ではじめに行われる「マーク・ピューレンの謎」という教材内容を「サンシイ事件」にアレンジし，新課程の年間指導計画(試案)に基づいて授業を行う。この教材開発の視点は，

○　史料とは調査によって裏付けをとるものであるという概念（史料の基本的性格）を理解させる。

○　史料を科学的に分析し，それを信憑性のある解釈をする経験を持たせる。

○　史料から導かれた様々な推論は仮説的なものであることを理解させる。

○　出来事を解釈する際の目撃証言の重要性を正しく理解させ，史料中にある矛盾に気づかせることである。

つまり，歴史学の学問概念を獲得させるためのケーススタディとして位置づけ，歴史的知識が獲得されたかどうかではなく，それを獲得する手段を身につけたかどうか，また，それら知識を論理的に関係づけて歴史観を構成できたかどうかという「歴史的思考力」の育成に重点が置かれている。その中で身近な地域の歴史的事象である「サンシイ事件」にふれることによって，琉球・沖縄の歴史が当時の日本や世界情勢と密接に関係していたことに気付き，現代社会を見つめるきっかけになるだろう。さらに生徒たちに思考過程のポイントをきちんとおさえさせることで，問題を解決する力をはぐくませることができ，よりよい生き方を求めて自分の考えを決定することができるであろうと考える。

（2）　生徒観

素直な生徒が多く，学習に対して真面目に取り組むが，与えられた課題から発展して取り組んだり，自ら進んで問題を見つけてそれを追究しようとする生徒は少ない。また，大胆な発想や自説を強く主張することが少なく，ものごとを深く，広く考えようとしない傾向も見られる。また，学習に対する基本的な習慣が身についていない生徒や人との関わりが苦手な生徒が多く見られるようになってきている。

私たちの人生は問題解決の連続である。変化の激しいこれからの社会を生きていくには常に新しい知識・技能や資質を獲得してそれぞれの問題に対応しなければならない。本検証授業ではぐくみたい問題解決力とは，この「生きるために必要な問題解決力」である。

以上のことをふまえ，「様々な人や物と主体的に関わりを持ち，自分自身の考えや生き方を見つめながら自ら進んで学ぶ生徒の育成」と「人生において様々な問題に対応しながらよりよく，たくましく生きていける生徒の育成」を目指したい。

4　指導計画（6時間）

段階	学　習　活　動	教　師　の　支　援
本時 つかむ ①	○歴史的事象（事件）についてのガイダンスを受ける。 ○推論および調査の計画を立案する。	○状況報告書と遺留品を見せ，その内容を理解させる。 ○推論が立てられるような支援を行う。 ○自分なりの解明方法が考えられるような支援を行う。 ○疑問点が見つけられるような支援を行う。 ○調査計画立案の支援を行う。
調べる ② ③ ④	○調査計画に基づいて，各自またはグループで調査を行う。 ○調査と同時に推論を行う。 ○調査・推論した内容をグループでまとめる。 ○発表に向けて，リハーサルを行う。	○調査・推論に対する支援を行う。 ○時代背景をつかませる。 ○協力してまとめられるよう支援する。 ○新たな疑問等が見つけられるような支援を行う。その際，調査計画の変更についての助言も行う。 ○多様な発表方法で行えるような助言を行う。 ○効果的で短時間で発表ができるように支援を行う。
確かめる ⑤	○グループごとに発表する。 ○他のグループの発表内容を聞き，質疑を行う。 ○他のグループの発表内容を参考に，推論を練り直し，自分なりの結論を立てる。	○事件の真相・時代背景などを考えながら，多様な考えを持たせられるよう支援を行う。 ○より真実に近づけられるような結論が立てられるような支援を行う。
まとめる ⑥	○自分なりの結論をまとめる。 ○さらに疑問に思ったことを発表する。 ○授業の感想を発表する。	○自分なりの結論がまとめられるような支援を行う。 ○本検証授業を通して「歴史とは何か」を体験したことに気づかせる。 ○本検証授業で体験したことを今後の歴史の授業に生かしていけるような助言を行う。

5　本時の活動（1／6）

（1）　本時のねらい

○　提示された資料(教材)に興味・関心をもたせる。

○　提示された資料(教材)から，疑問（矛盾）点を見つけられるようにする。

○　推論を立て，調査(学習)計画をつくる。

（2）　本時の展開

過程	授業の流れ	生徒の活動	教師の支援	評価
導入 5分	前時の確認	○今までの授業内容を確認する。	○今までの授業内容についての話をする。	
展開 40分	状況報告書の提示	○状況報告書を読む。	○状況報告書を提示し読み合わせをする。	○資料内容を把握できたか。
	推論を立てる	○あらましを推論する。	○自由に推論させる。	○自分なりの推論が立てられたか。
	推論の発表	○推論を発表する。	○多様な視点があることに気づかせる。	
	解明方法を考える	○全体解明に必要なこと(もの)を考える	○良い方法が考えられるよう助言する。	○解明方法を考えることができたか。
	解明方法の発表	○全体解明の方法を発表する。	○目撃情報の必要性に気づかせる。	
	遺留品の提示	○遺留品を確認する。 ○疑問点を見つける。	○遺留品を提示し，説明する。 ○疑問点が見つけられるよう助言する。	○疑問に思ったことを見つけたか。
	調査計画をつくる	○推論を確かなものにするための調査計画を立てる。	○自分の推論をもとに他者の意見や参考文献をも参考にしながら調査計画を行うよう助言する。	○適切かつ効率的な調査計画を立てられたか。
まとめ 5分	次時の確認	○これからの授業の流れを確認する。	○次時からの授業の流れを説明し，推論や調査計画が立てられない生徒は引き続き助言する。	

6　提示資料および各種プリント

社会科の基礎・基本部分である「社会的なものの見方・考え方」，そして問題解決的な学習を通して，自己解決できる力をつけさせるために，資料開発を行った。その結果，問題解決的な学習が活発に展開し，地域教材の開発の意義に即した思考・判断・行動の螺旋的（スパイラル）拡大が見られた。

事故調査報告書

死亡者の詳細
氏名：　　年齢：　　職業：

死亡者の遺留品

事故当日の死亡者の行動

時間	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18

注目すべき点

この事故に関する推論（日時・場所・事故状況等を詳しく）

署名：

調査計画書

2年5組＿＿番　氏名＿＿＿＿＿＿

日時	活動内容	その他（準備すべきもの）
内容をつかむ 1／24(月3)	事故および男の遺留品の説明を受ける。 事故の推論をたてる。調査の計画を行う。 調査計画書の提出。	
調べる 1／25(火3)		
調べる 1／26(水6)		
調べる 1／28(金4)		
確かめる 1／31(月3)	（グループごとに発表する）	
まとめる 2／ 2(水6)		

調べ方や疑問・質問は先生にジャンジャン聞いてください！

「身近な地域の歴史」 発表評価プリント

2年5組〔　〕番　氏名〔　　〕

〔　〕班	良かった点
①わかりやすい内容だったか？ ◎－○－△－× ②表現力はどうか？ ◎－○－△－× ③チームワークは？ ◎－○－△－× ④質問への受け答えは？ ◎－○－△－×	感想
総合評価〔　〕	

〔　〕班	良かった点
①わかりやすい内容だったか？ ◎－○－△－× ②表現力はどうか？ ◎－○－△－× ③チームワークは？ ◎－○－△－× ④質問への受け答えは？ ◎－○－△－×	感想
総合評価〔　〕	

〔　〕班	良かった点
①わかりやすい内容だったか？ ◎－○－△－× ②表現力はどうか？ ◎－○－△－× ③チームワークは？ ◎－○－△－× ④質問への受け答えは？ ◎－○－△－×	感想
総合評価〔　〕	

※　総合評価は　A　B　C　の3段階で。

社会科　歴史的分野
「身近な地域の歴史」

2年5組＿＿班　氏名＿＿＿＿＿＿

学習意欲に関する自己評価

自分の意欲を、5 4 3 2 1の5段階のどれにあてはまるか。あてはまるものに○をつけよ。
意欲：　高い ←　→ 低い
5　4　3　2　1

内容をつかむ 1／24(月3)	5	4	3	2	1
調べる 1／25(火3)	5	4	3	2	1
調べる 1／26(水6)	5	4	3	2	1
調べる 1／28(金4)	5	4	3	2	1
確かめる 1／31(月3)	5	4	3	2	1
まとめる 2／ 2(水6)	5	4	3	2	1

授業に取り組んでの感想を書こう。

遺留品①

通知書

住所　平良間切下里村

氏名　下地利社

生年月日　安政四年六月八日

右ノ者　沖縄縣警察

宮古島派出所

二任ズル

明治壱拾弐年七月八日

沖縄縣警察

状況報告書

明治壱拾弐年七月弐拾弐日午后参時半頃、沖縄縣宮古島平良間切下里村南方ノ角地ノ空地ニ於ヒテ、血塗レニナッテ倒レシ男ガ居ルト村人ヨリ通報アリ。倒レシ男ハ年齢弐拾歳カラ参拾歳程デ、空地中央ニ俯セノ状態デ既ニ死亡。

着衣ハ土ト血ニ塗レ、着衣ノ破損モ著シイ。腕ハ后ロニ回サレ、両肘ト両手首ヲ荒縄デ縛ラレル。顔面及ヒ体表面周ル箇所ニ鬱血ノ痕跡並ヒニ創傷多数アリ。其ノ為身元確認困難ナリ。

現場状況ハ、當日明朝ニ降リシ雨ニヨリ、泥濘アリ。其ノ為、現場周辺ニ無数ノ足跡アリ。又大小多数ノ石並ヒニ棒等アリ。

更ニ、現場カラ當派出所間ノ長距離ニ渡リ何ラカヲ引キズリシ形跡並ヒニ血痕見ラレル。

尚、別件デハアルガ、其ノ事故通報ヲ受ケシ約弐時間前ニ當派出所附近ニ於ヒテ騒動アリ。

又、其ノ時間ニ下里村各部落ニテ口笛ヤ法螺ノ音聞コエシ。現在、本件トノ関連ニツヒテ調査中ナリ。

以上

明治壱拾弐年七月弐拾弐日

宮古派出所　警部　石川貞清

遺留品②

遺留品③↑

遺留品④↓

7　本時の評価

（1）　意欲的に本時の授業に参加することができたか。

（2）　提示された資料(教材)から，疑問（矛盾）点を見つけられたか。

（3）　推論を立て，調査(学習)計画をつくることができたか。

8　本時の反省

○　意欲的に授業に参加する態度が多く見られ，興味・関心は高められた。それを持続させるためにも教師の支援は重要になってくる。

○　自分なりの推論を立てられる生徒がかなりいた。

○　資料は個々に配布するよりも実物なりのものを全面掲示することによって，さらに興味・関心が高められたのではないか。

○　資料中に読解困難な漢字が多数あり，内容全体の把握に時間がかかった。また，資料数を必要最低限を提示することによって学習計画の見通しを容易にたてられるのではないか。

○　一時間で内容把握・問題点の発見・学習計画立案・自己評価を行うには難がある。学習計画の立案は，問題解決に見通しをもって取り組ませるために重要であるので，その部分は一時間を設定してもよかった。

Ⅵ　研究の成果と課題

1　研究の成果

（1）　授業後の感想文の考察

○　この授業はとても楽しかった。やり方もおもしろかったし，何もわからないところから　事件を解明するのもおもしろかった。もっと知りたいこともあったので，自分で調べてみ　ようと思った。こんな授業がもっとあってほしいです。

○　この授業をして調べていくうちに友達のいろんな意見が出て，自分たちで推理していくのが楽しくなっていきました。また，自分たちの身近にはいっぱいの歴史があって，その歴史をもっと知りたいという気持ちがわいてきました。みんなで調べ，考えて，発表してとても楽しかったです。

○　自分とは違った意見がいっぱい聞けてよかったと思います。

○　とても楽しかった。次は戦争のことを調べてみたい。

○　授業ではいろいろな謎があったけれど，資料を調べたり，聞き込みをしたりして解決していきました。歴史ってこんなふうに調べていくのかなあと思った。

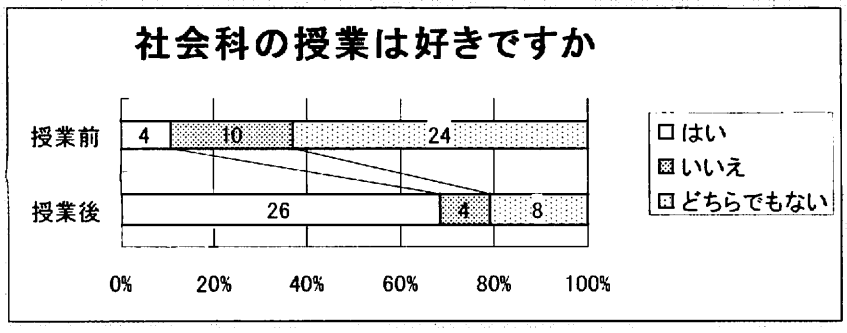
○　いろいろな角度から事件を見ると，たくさんのことがわかりました。

○　最初は推理と歴史は関係ないと思っていたけど，自分たちで調べていくのがおもしろいと思いました。身近な歴史について，もっと関心を持っていけたらいいなあと思いました。

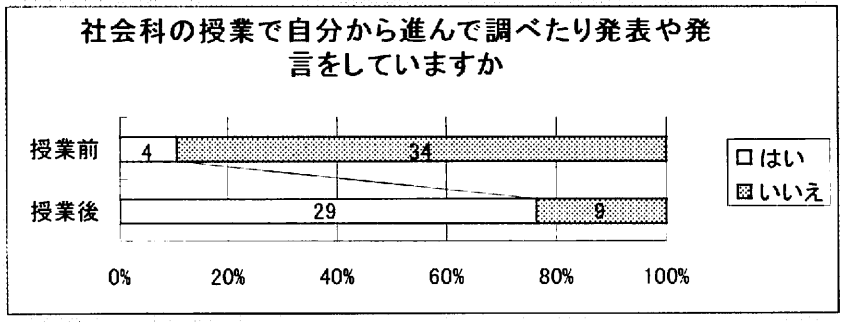
○　最後にみんなの推理を聞いて，やっとわかったような気がした。みんなや先生の話を聞いてなるほどと思うところがたくさんあった。沖縄に住んでいるけど沖縄の歴史は全然わからなかった。昔の沖縄は外国ともいろんな関係があったんだなあと思った。

意欲的に問題解決を行っていたことや地域の歴史への興味・関心が高まったこと，さらに新たな問題（課題）を追究してみたいなど，仮説を裏付ける内容が，多くの感想文から読みとれた。

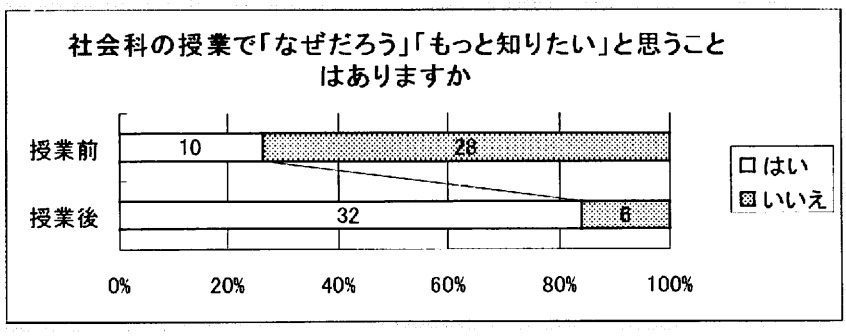
（2） アンケートの考察



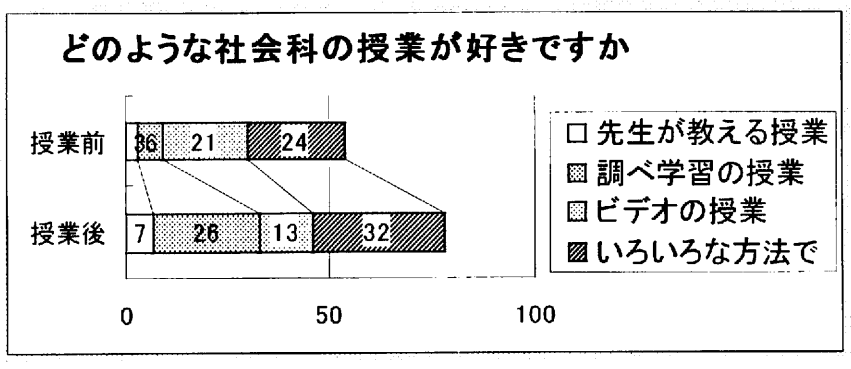
授業前は好きでも嫌いでもない生徒の割合が半数を超えたが，授業後は好きと答えた生徒が急増している。全体として社会科の授業を楽しいと感じ，興味・関心度が高まったといえる。



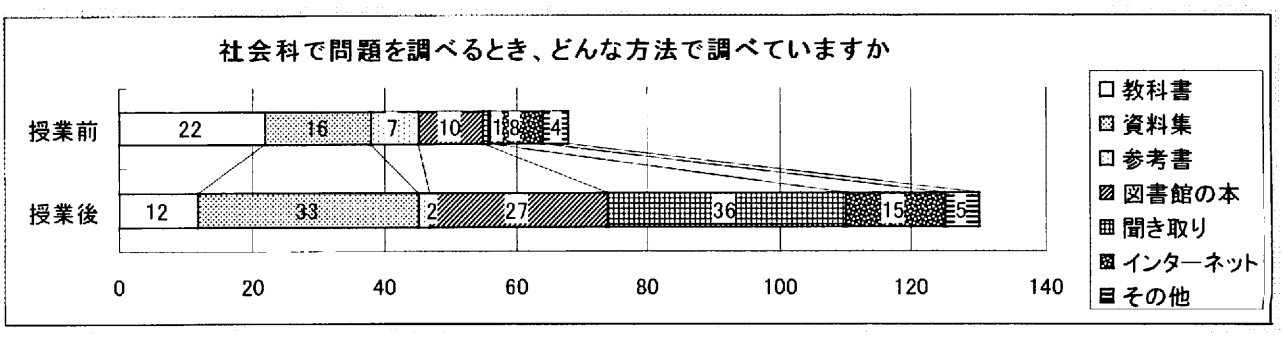
授業前はほとんどの生徒が授業への積極的な参加を行っていないが，本検証授業を通して，積極的に参加していたことがいえる。



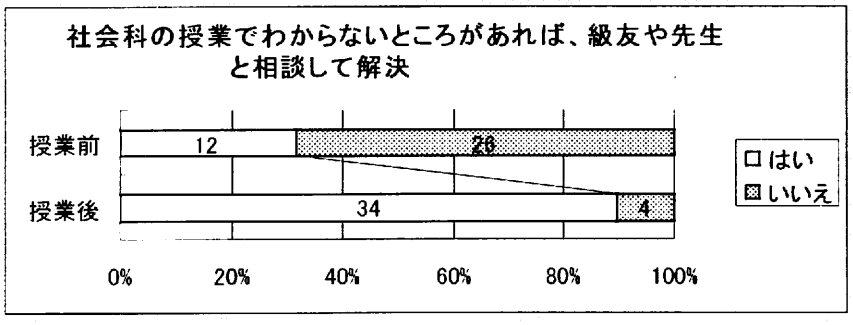
授業前に比べて，疑問に思うことや事象を追究してみたいという生徒が増えていることから，問題解決的な学習の重要な部分である「問題の把握」がきちんと行われ，その能力が高まったといえる。



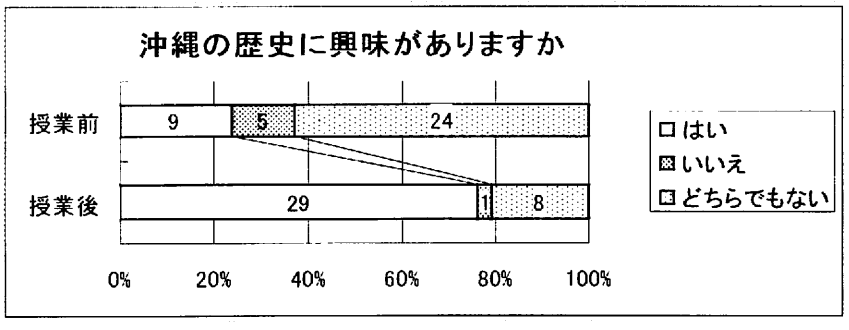
全体として，教師主導型よりも生徒主体の授業を望んでいることがいえる。特にいろいろな方法を組み合わせた授業や調べ学習をあげた生徒が，授業後急増していることから，本検証授業を通して生徒の実態に即した調べ学習が行われたといえる。



資料（情報）収集が教科書のみにとどまらず，資料集や図書館資料・聞き取り・インターネットなど多岐にわたっておこなわれている。また授業前と比べて追究手段の総数が倍増していることから，自分なりの追究方法を模索し，調べ学習が活発に行われたことがいえる。



授業前と比べて，級友や先生と相談して問題解決を図った生徒が増えていることから，自分なりの考えを他者とよりよく「関わり合い」ながら，思考を深めることができたといえる。



身近な地域の歴史を取り入れたことにより，興味・関心をもった生徒が増えていることから，提示した教材や問題解決的な学習形態が，持続性をもって生徒の興味・関心を高めたことがいえる。

（３）　作業仮説１について

「誰でも容易に理解できるもの」「意外性のあるもの」「追究・探究心をくすぐるもの」「内容に発展性のあるもの」という教材内容の四つの柱を提示資料に盛り込んだことで，社会事象に対して疑問をもち，追究してみようという態度が見られ，社会事象に対する興味・関心が高まり，自ら学習するテーマ設定がしやすくなった。

問題解決的な学習に取り組ませる際，初期の問題把握が学習の方向性を決める重要な活動であると考える。

（４）　作業仮説２について

○　既習事項をもとに共通点や相違点を考えさせる支援を行うことで，生徒は問題把握がしやすくなった。

○　問題解決のための実行可能な計画を立てさせる支援を行うことで，生徒は学習に見通しを持ち，意欲的に取り組

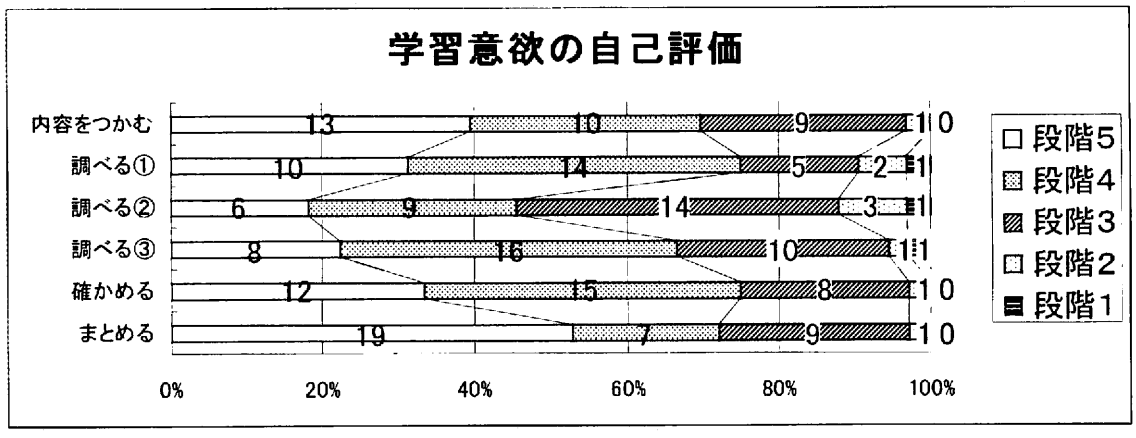
むことができた。

○　問題を多面的・多角的にとらえさせる支援を行うことで，生徒は主体的に問題解決に取り組み，新しいものの見方ができた。

○　グループで協力して問題解決を図る支援を行うことで，生徒は問題発見や追究の場面などで自らの考えを出しやすくなり，問題追究に深まりがでた。

また，級友の良さを知ると同時に，級友から認知されることで，人と関わり合いながらよりよく問題を解決していこうとする姿勢が生まれた。

○　自己評価や相互評価カードなどを適時支援に生かすことにより，持続的に生徒の学習意欲を高めることができた（下のグラフ参照）。



（5）　作業仮説３について

新課程に基づく歴史的分野の年間指導計画(試案)のなかで，地域史を関連または特設教材として系統的に扱い，またその中で歴史学の学問概念を獲得させるために，問題解決的な学習形態の単元を設定したことにより，琉球・沖縄の歴史が当時の日本や世界情勢と密接に関係していたことに気付き，身近な歴史に興味・関心が高まり，地域に対する理解が深まった。

2　今後の課題

○　誰でも容易に理解できる資料開発と提示の工夫。

○　地域にはたらきかける学習形態の開発。

○　問題解決的な学習の形態を日常の学習活動で継続的に取り組む。

○　生徒が自ら問題を追究・解決できるようなゆとりをもった学習時間の確保。

おわりに

本研究は，「暗記型」社会科教育から「思考型」への転換で，社会科における「生きる力」をはぐくむことを目指し，「生きる力」や問題解決的な学習，地域素材の教材化についての理論研究と，それに基づいて「思考」重視のイギリスの歴史教育教材を例に授業実践を行ってきた。今後，新たな授業実践を行っていくとともに，その実践上の問題点を明確にして，社会科における「生きる力」を生徒にはぐくむことができるよう努力していきたい。

最後に教科指導員として御指導いただきました港川中学校教諭の与儀喜一郎先生，また６ヶ月間という長期にわたる教育研究の機会を与え支援してくださいました浦添市立港川中学校の棚原正栄校長をはじめとする諸先生方や浦添市教育委員会の先生方，そして当研究所の新城所長，池田係長，与古田主事，他職員の皆様に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

主な引用・参考文献

有田和正著（１９９２）　『「生きる力」を育む社会科授業』　明治図書

有田和正著（１９９７）　『社会科授業づくりの技術』　教育出版

小俣盛男編（１９８４）　『歴史歴分野の授業理論』　明治図書

北　俊夫著（１９９５）　『新学力観に立つ社会科』　明治図書

有園　格著（１９９７）　『「生きる力」を育てる学習指導』　ぎょうせい

羽豆成二著（１９９７）　『子どもの「生きる力」が育つ社会科の授業改造』　文教書院

藤井千春著（１９９６）　『問題解決学習のストラテジー』　明治図書

藤井千春著（１９９７）　『問題解決学習で「生きる力」を育てる』　明治図書

浦和市立教育研究所編（１９９８）　『生きる力をはぐくむ学習指導の研究』

宝輪博継・沼田拓己・喜多敦著（１９９９）　『「生きる力」をはぐくむ学習指導の研究』
十勝教育研究№２６２

十勝教育研究所編（１９９９）　『「生きる力」をはぐくむ学習指導の研究』
十勝教育研究№１８５

和歌山大学教育学部附属中学校編（１９９９）　『いとなみ　第３８集』

琉球大学教育学部附属中学校編（１９９９）　『社会科実践研究資料集』

土屋武志著（１９９７）　『新学力観にもとづく歴史教材開発の視点－イギリスの歴史教育を例に－』
愛知教育大学教科教育センター研究報告第２１号